

文末表現のイントネーションと男女差

鈴木 千寿

1. はじめに

終助詞「わ」が女性語であるというとき、「上昇イントネーションの場合」と但し書きされることがある。つまり、「わ」はイントネーションにより、女性的になったりそうではなくなったりするということだ。本稿では、「わ」以外にも、イントネーションによる男女差が認められる文末表現があると考え、それを指摘することを目的とする。

2. 先行研究

Kitagawa(1977)は、男性的な「わ」は“falling intonation”、女性的な「わ」は“high sustained intonation”⁽¹⁾であることについて考察した後、「かしら」「こと」「の」「よ」についても同様に、“high sustained intonation”の場合に限り女性的になることを指摘している。

大曾(1991: 45)は、「平叙文に『よ』が付いたものをイントネーションから見ると、少なくとも次の二つの場合が区別できる」と述べ、「話し手が自分の意見を一方的に主張する」場合は下降調、「聞き手の知らないこと、忘れていることを教えてあげるという意味を表す」場合は上昇調のイントネーションとなることを指摘している。そして、「下降調の『よ』の場合、男性語でも『だ』を省くことが可能なようだ」と考察を加えている。

轟木(1992)は、東京語の文末詞の音調を「低くつく平坦な音調」「上昇調」「同じ高さにつく下降調」「強調上昇」「上昇してから下降する音調」の5種類に想定し、考察している。「強調上昇」とは、例えば「見るの?」と問いかけるときの「の」の音調とは異なる、「見るの!」と強く主張するときの「の」の音調のことで、その区別が重要になるのは「の」と「って」であると述べている。また、「よ」に関して、女性語の「よ」は名詞および形

容動詞語幹に接続し、同じ高さにつき、尾高型の語には低くつくと指摘し、「上昇調」だけであると加えている。

鷲 (1996) は、音調の上下で話者の性差を示す「わ」の機能を、「ジェンダー標識」としてとらえているが、Kitagawa(1977)が「よ」「の」等、終助詞の上昇音調と女性話者の結びつきを強調している点には反論している。

「ぞ」「ぜ」が規範の上では音調の上下に係わらず男性発話と判断されることを指摘して、必ずしも終助詞の下降音調が男性、上昇音調が女性に結びつくわけではないと述べている。

3. 調査について

3.1 考察の対象

本稿では、文末表現の中から「よ」「の」「のよ」「んだ (のだ)」を考察の対象とする。これは、修士論文を書くにあたり「男性語／女性語」規範の調査を行なったところ、イントネーションによる男女差があるのではないかと思われたものである。

3.2 調査の資料

資料は、テレビドラマの台詞を使用した。台詞は、方言指導者である大原 (1994 : 51) も述べているように、全国の人達に鑑賞されることを前提に作られているため、日常会話そのままではない。作者 (脚本家・小説家・著者など) の規範に基づいて書かれた話し言葉⁽²⁾である。従ってこの資料を使用するということは、「実態」ではなく「規範」の中での男女差を考察することになると考えられる。

場面は、インフォーマルな場面 (家族・夫婦・親しい友人間の会話) に限った。

3.3 調査の対象

調査の対象としたのは、「女性的表現」⁽³⁾を比較的多く使用していると思われた男性の登場人物、「男性的表現」⁽⁴⁾を比較的多く使用していると思わ

れた女性の登場人物、また、人物設定が既に「異性的」（男性が女性的、女性が男性的）とされている登場人物である。さらに比較のため、特に「異性的」表現を多く使用しているとは言えない登場人物も調査に加えた。

これらの調査対象とした登場人物たちを、男性的表現と女性的表現の使用の割合によって、便宜上3つのグループに分けた。なお、3に分類されたのは男性のみであったため「(男性)」と記した。

1. 男性的表現としてあげたものをほとんど使用しており、中に一部女性的表現も混じる人～仮に「男性語話者」と表わす。
2. 女性的表現としてあげたものをほとんど使用しており、中に一部男性的表現も混じる人～仮に「女性語話者」と表わす。
3. 極端な偏りの見られない人～仮に「男性語・女性語話者（男性）」と表わす。

3.4 調査の方法

今回の調査ではまず、資料を文字化した後、考察の対象とした文末表現のイントネーションを、轟木（1992）に基づき5種類に分類した。その際、前述の男性語話者／女性語話者／男性語・女性語話者（男性）という枠組みを使用して考察した。

4. 結果と考察

4.1 「よ」

普通体＋「よ」は男性的表現としたが、「上昇調」での発話は女性語話者の使用にも多数見られる。一方、上昇しないイントネーションをまとめて、「非上昇（↓）」と表わすと、女性的表現とした「だ」の省略＋「よ」で「非上昇」の発話は、あまり多くはないが男性語話者にも見られる。

また、「照れちゃうよ↓」⁶⁾のように、「よ」の前が感情表出になっている場合は、「よ」が「上昇調」のイントネーションでは発話されず、必ず「非上昇」になることがわかる。このような場合はもちろん、男性語話者でも女性語話者でも「非上昇」のイントネーションとなる。また同様に、「なによ↓」

「なんだよ↓」のように、「よ」の前に疑問詞が含まれている場合も、「よ」が「上昇調」のイントネーションでは発話されないため、必ず「非上昇」のイントネーションとなる。このようにイントネーションが「非上昇」に限られる場合、女性語話者は、やはりその前が「だ」を省略した形になることが多かった。

轟木（1992）は、「強調上昇」について、その区別が重要になるのは「の」と「って」であると述べていたが、今回の調査では「よ」にも見られた。しかも、それを使用しているのは男性語話者と男性語・女性語話者（男性）だけで、女性語話者には見られなかった。本稿では以後、「上昇調」には「↑」をつけ、「強調上昇」は「よ」のように太字にして示す。以下、例をあげる。

例：（涙目になっている友人に）「なに涙目になってんだよ」

（不妊の原因が自分だと言い、妻をかばって）「彼女は関係ないよ」

次に、間投用法の「よ」について考察する。『日本文法大辞典』（1971:888）に「間投助詞」の例としてあがっている「もしもよ、ほんとにそうになったらどうする」「そうでなければだよ、だれが反対などするものか」は、恐らく上昇調で発話されるのであろうが、資料には間投用法で上昇調のものは1例もなく、全て「非上昇」であった。また、「よう」という上昇してから下降する音調で発話されているものも多く、これは同書で、「いっそう粗野な、あるいは方言的な感じを強める」と述べられている。そのためか、男性語話者のみの使用となっている。以下、例をあげる。

例：「安月給もらってよう、（もうすぐ正社員だ？）」

「おまえよう、（はっきり言ったらいいじゃねえか）」

男性的表現でイントネーションも「非上昇」であるが、女性語話者の発話である「勝手だよ↓」や、女性的表現でイントネーションも「上昇調」であるが、男性語話者の発話である「実力よ↑」も、少数ながら現われており、音調も含めて中性化がすすんでいる可能性は指摘できよう。

4.2 「の」

「強調上昇」の「の」は、『日本文法大辞典』（1971:653）で『あなたは

心配しないで、勉強だけしていればばいいの』『そんなに兄弟げんかばかりしていないの』のような表現で、『の』にアクセントをつけて強く発音すれば、命令的な表現となる」と述べられている用法と一致すると思われる。今回の調査では、男性語話者が使用した平叙文の「の」は、ほとんどがこの「強調上昇」の用法、つまり「強く主張する」ものであった。しかし、男性語・女性語話者（男性）の使用した「の」は、女性語話者と同様「非上昇」も多く、彼らと男性語話者の違いの一つとなった⁶⁾。以下、男性語話者が使用した例をあげる。

例：「おまえ全然わかってねえなあ。男はねえ、頭と体が別々なの」
（「もう行くのかよ」と言われ）「おまえと違って忙しいの」

4.3 「のよ」

男性語話者が使用している「のよ」は、以下の3例のみだが、その3例とも「非上昇」のイントネーションであった。

例：「みんなをあとと言わせてやんのよ（↓）」
「男はねえ、頭と体が別々なの。別の生き物なのよ（↓）」
「そういう芝居じゃないのよ（↓）」

それに対し、女性語話者の「のよ」は「非上昇」も「上昇調」も、さらに「強調上昇」も見られたので、少なくとも、上昇のイントネーションの方が「非上昇」のイントネーションよりも「女性的」である可能性はある。以下、「非上昇」「上昇調」「強調上昇」の順に例をあげる。

例：「何やってんのよ（↓）、痛いわねえ」「来なかったのよ（↓）」
「幸せになるのよ（↑）、エミ」「ゆうべ、心配してたのよ（↑）」
「何やってんのよ」「家族でもないのになんで同席してんのよ」

4.4 「んだ(のだ)」

「だ」での言い切りは男性的表現としたが、「んだ」は、「ん」に「だ」が高くつく場合（「上昇調」とも「強調上昇」とも異なる）と、「んだ」が「同じ高さにつく下降調」⁷⁾の場合は、女性語話者の発話にも見られる。しかし、

「上昇調」の場合と下降せず「平坦な音調」の場合は、女性話者の発話には見られない。以下、「ん」に「だ」が高くつく場合は無印、「下降調」には「↓」、「上昇調」には「↑」、「平坦な音調」には「→」を付けて例をあげる。

例：女性話者

「ミユキさんに似てるんだ」「カシワギさん来てくれたんだ」

「お揃いなんだ（↓）」「かけるようになったんだ（↓）」

男性話者と男性語・女性話者（男性）

「絵、かけなくなっちゃったんだ」

「昼間の話、本気にしてたんだ（↓）」

「どうしたんだ（↑）、おまえこそ」「なんで来ないんだ（↑）」

「ほっとすんだ（→）、マコちゃんといると」「好きなんだ（→）」

「ん」に「だ」が高くつく場合は、聞き手に対して話しているのではあるが、自分にも言い聞かせている独り言のような機能があると思われ、そのため女性話者の発話にも見られたのではないかと考えられる。また、この場合の「上昇調」は疑問の表現であり、「平坦」は話し手の主観に基づく述べてであると考えられる。

5. まとめ

今回の 調査の結果、イントネーションの違いによって男性話者と女性話者の使用に違いが見られたものを、以下にまとめる。

- ・普通体＋「よ」は男性的表現としたが、「上昇調」での発話は女性話者も多用している。「だ」の省略＋「よ」（「非上昇」）は、男性話者も使用しているが、あまり多くはない。感情表出の場合や疑問詞が含まれている場合は、男性話者／女性話者に関わらず「非上昇」で発話される。

- ・普通体＋「よ」が「強調上昇」で発話される場合、女性話者の使用はなく、間投用法の「よ」が「非上昇」で発話される場合は、男性話者のみに使用が見られた。

- ・平叙文の「の」は中性化が指摘されていたが、男性話者は特に「強

調上昇」での使用が目立つ。

・「のよ」は女性的表現としたが、「非上昇」での発話は男性話者にも見られる。

・「んだ」で言い切る場合は男性的表現としたが、「ん」に「だ」が高くつく場合と「下降調」の場合は女性話者も使用している。

以上、イントネーションにより、男女差があると思われる文末表現を考察した。中性化が指摘されている文末表現も、全体が等しく男性にも女性にも使用されるようになっていないわけではない可能性があることが明らかになった。

付記：本稿は、修士論文の一部を修正、加筆したものである。

注

- (1) 真偽疑問文のイントネーションだが、よりきつい言い方となる“high intonation”と分けて述べられている。
- (2) ただし、脚本の台詞そのままではなく、実際に番組中で使われた言葉を文字化したため、実際の脚本よりは話し言葉としての性質が強くなっていると思われる。
- (3) 用語は益岡・田窪(1992)による。文献(MacGloin1990他)で「女性語」とされているもののうち、修士論文で取り上げた表現。詳しくは、鈴木(1999)を参照。なお、本稿での考察の対象で女性的表現としたものは、「だ」の省略+「よ」、「の」(「の」を含む疑問文で「の」だけで表わされているものは除く)、「のよ」。
- (4) (3)と同様、「男性語」とされているもののうち、修士論文で取りあげた表現。本稿での考察の対象で男性的表現としたものは、普通体+「よ」、間投用法の「よ」、「だ」での言い切り。
- (5) (兄弟に婚約の報告をする前)「なんか照れちゃうよ」という女性話者の発話。
- (6) 詳しくは、鈴木(1999)を参照。
- (7) 轟木(1992:57)では、「前節の拍が低いときには、低くつく平坦な音調がさらに長くなったような音調となる」と述べられている。

参考文献

- 大曾美恵子(1991)『『でしょう』『よ』とイントネーション』『関西外国語大学留学生別科
日本語教育論集』第1号 関西外国語大学留学生別科
- 大原穰子(1994)「ドラマの方言」『日本語学』13巻5号 明治書院
- 鈴木千寿(1999)「テレビドラマの台詞に見る『男性語』『女性語』の諸相」名古屋大学大
学院文学研究科修士論文
- 轟木靖子(1992)「東京語の文末詞の音調と機能についての考察—『よ』を中心に—」『日
本語・日本文化研究』第2号 大阪外国語大学日本語学科
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- 松村明編(1971)『日本文法大辞典』明治書院
- ロビン・レイコフ／かつえ・あきばば・れいのるず訳(1990)『言語と性—英語における女
の地位』有信堂高文社
- 鷲留美(1996)「現代日本語の性差についての一考察—女ことばとしての終助詞『わ』を巡
って—」『日本語・日本文化研究』第6号 大阪外国語大学日本語講座
- kitagawa, Chisato. 1977. A source of Femininity in Japanese : in Defense of Robin
Lakoff's 'Language and Women's Place'. Papers in Linguistics 10.
- MacGloin, N. H. 1990. Sex difference and sentence-final particles. In S. Ide &
N. H. MacGloin (eds.), Aspects of Japanese women's language.
Kuroshio Publishers.

資料として使用したテレビドラマ

- 「愛、ときどき嘘」1998年4月～7月 日本テレビ系 約8時間分
- 「たたかうお嫁さま」最終回 1995年12月 日本テレビ系 約1時間分
- 「たたかうお嫁さま 新婚スペシャル」1996年4月 日本テレビ系 約2時間分
- 「たたかうお嫁さま 妊娠スペシャル」1996年12月 日本テレビ系 約2時間分
- 「友達の恋人」1997年4月～7月 TBS系 約10時間分
- 「バージンロード」1997年1月～3月 フジテレビ系 約10時間分
- 「PUFFYのドラマ・ワイルドでいこう」1997年9月 日本テレビ系 約2時間分
- 「ひとつ屋根の下2」1997年4月～7月 フジテレビ系 約10時間分